

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答番号は〔二〕の 1 から 13 までとする。

以上の点からすれば、ある特定の個人がある集団の代表者であることによって、その集団の不幸事に関して明確な因果責任の有無によらずに、謝罪する理由があるのは、代表者となることをみずから選択し、それに伴う役割責任を負っているためだと言えるだろう。また、先述の論点を繰り返すなら、代表者以外の成員がときに集団を代表して謝罪する理由があると見なされるのも、その根底には、「集団に入ったり集団から出たりする選択肢が存在する」という条件があると言えるだろう。

ただ、このような選択肢の存在は、あくまでも原理的な次元の話であって、実際に集団から離脱する選択ができるかどうかは別問題だ。たとえば、再就職が非常に難しい状況下で、A社を辞めれば自分や家族がロトウ^㉑に迷ってしまうという場合、退職届を出すことは現実にはきわめて困難だろう。

① 同様のことは、国籍の離脱の可能性に関しても当てはまる。たとえば、ある国が他国に侵略し、そこで略奪や暴力などの蛮行も行ったとしよう。そうした行為に直接関与した人々の責任が、事実関係のセイサ^㉒も含めて厳しく追及されるべきであるの言うまでもない。ただ、それとは別に、特に前の世代が十分な謝罪や賠償を行わず、また、侵略された国の人々から赦^{ゆる}しを得られずに非難が続いている場合には、後続するいわゆる戦後世代——戦前・戦中は幼い子どもだった人々や、戦後にその国に生まれ育った人々——も、被害に遭った国の人々やその子孫などから謝罪や賠償を求められる場合がある。戦後世代は、前世代の行為に関して何の因果責任もたず、その点で、非難されるべきことは何もしていないにもかかわらずだ。

こうした場合、戦後世代の人々が謝罪や賠償を拒絶するために国籍を離脱するというのは、大抵の場合は現実的な選択肢ではないだろう。自分が生まれ育った国の国籍を失うことは、多くの人にとってきわめて大きな負担や損失となるし、これまでの生活を捨て、他国の国籍を取得してそこで暮らすというのも容易ではないからだ。

さらに、そもそも国籍に関しては、それを抜けば前世代の行為と完全に縁が切れるとは限らない。その国に税金を納めることがなくなれば、賠償金の負担自体は消失するかもしれないが、少なくとも、謝罪が不要になるとは限らないのである。

② この点を、アーレントの用語に倣って集合的責任 (collective responsibility) という観点から明確にしよう。アーレントによれば、この「集合的責任」という概念は、

(1) 自分自身がしていないことについて問われるもの

(2) 自分の自発的な行為では離脱できない集団に属しているがゆえに負うべきもの

という二条件を同時に満たす責任にほかならない (Arendt [1968] 2003: 149/277-278)。したがって、たとえばある企業に属しているがゆえに社員が負う責任は、アーレントのいう「集合的責任」に含まれないことになる (ibid.)。というのも、社員は通常、企業から自発的に離脱可能と見なされるからだ。だとすれば、ある国に属しているがゆえにその国民が負う類いの責任も、国籍を離脱する自由があるのであれば、「集合的責任」に含まれないはずである。

以上の点からすれば、「集合的責任」とは典型的には、ある国の出身者であるとか、誰かの生物学的の子や孫であるといった意味で、^③ 国家や一族などの集団から原理的に離脱できない者が負うべき責任、として特徴づけることができるだろう。では、そのような者たちになぜ、謝罪や賠償などを行う理由があると言えるのだろうか。

政治学者の齋藤純一は、日本の戦後世代に属する者のひとりとして、次のように論じている。

戦後世代が集合的責任を負うべき理由は、私たちが、数多くの不正義を刻んだ歴史的関係性を先行する世代から継承し、私たち自身もそうした関係性をすでに生きてしまっているという事実にあると思う。……戦後さまざまな事情から日本国籍を取得し、国民となった人びとが、集合的責任をめぐって私たちと同一の位置に立たないのは、彼女／彼らが私たちと同じ歴史的位相をもたないからである。集合的責任の理由は、国民として政治的その他の特権や利益を享受しているというファクターだけでは説明しえないように思える。(齋藤一九九九: 89)

日本の戦後世代が責任を負うべき理由があるとして、それが日本という国の国籍をもっていることで特権や利益を享受して

いることそれ自体に尽きるのだとしたら、そうした特権や利益を手放した場合、その分だけ責任は減免されるだろう。むしろ肝心なのは、そうした特権や利益の源泉ともなっているもの——日本の文化や伝統、慣習、遺産、財産、インフラ、等々——の下に自分が生まれ育ち、自分自身のアイデンティティの多くの部分がかたちづくられているという事実だ。その事実自体は、自分の意志で得たものではないし、また、自分から自発的に切り離しようがないものである。

親や祖父母の代理として——または、彼らから重要なものを継承している当事者として——彼らがしたことについて謝罪する場合と同様に、日本の戦後世代が戦前・戦中世代のしたことについて責任を負って、特に謝罪という行為を行うとすれば、その主たる理由も、そうした原理的に自分から切り離しえない要素のゆえである。すなわち、自分がどこで誰から生まれたかとか、どのような環境の下で育ってきたかという要素である。それが、^④集合的責任を負って謝罪することの意味なのである。そして、この種の要素のなかには、先行世代が他国の人々とどうかかわってきたかということも含まれる。そのような種々の歴史的関係性の延長線上に、後続世代と他国の人々とのいまの関係性もあるのだ。

他方、たとえば外国で生まれ育った人が戦後に諸事情で日本の国籍を取得して暮らしている場合、自分が納めている税金の一部が賠償金に用いられているのであれば、その点で、責任をとる行為の一部を分担していると言える。さらに、日本の国籍を取得することなく、外国人としてこの国で暮らしている人も、消費税や所得税などの種々の税金を納めているから、その点でやはり責任を分担しているとも捉えうる。しかし、彼ら（＝戦後に日本国籍を取得して生活している人、および、日本国籍を取得せずに日本で生活している人）は、日本という国家が過去に犯した侵略行為や非人道的行為に関して、少なくとも謝罪をすべきだとは見なされないだろう。それは、先の引用において齋藤が指摘している通り、彼らは日本で生まれ育った戦後世代と「同じ歴史的位相をもたない」からだ。言い換えれば、前の世代から継承しているものの内実が違うのである。

（中略）

また、忘れてはならないのは、先行する世代のしたことに関して後続する世代が負いうる集合的責任は、自分の意志で引き受けたものでも、自分の意志でホウキでできるものでもない、ということだ。^⑤彼らは、コントロール可能性に基づく因果責任を

負っているわけでも、自発的な役割責任を負うわけでもないのだ。

以上の点から、集合的責任を負うことの二環として謝罪することは、謝罪の主体がどこまで拡がりうるかということに関して、まさにその限界事例となるものだと言えるだろう。

そして、限界事例だということは、謝罪する理由があるか否かについて、人によって判断が大いに分かれるということでもある。先に確認した通り、財産や財産権など、自分の意志で放棄できるものを前世代から受け継いでいる場合ですら、^④ドウギ的にも法的にも、前世代のしたことについて謝罪しなければならないというわけではない。まして、どこそこに生まれ育ち、そこで継承したものが自分の多くの部分をかたちづくっているという、自分では動かしえない事実によって、人が謝罪の義務を負うことはありえない。

11

、先行世代が犯した行為の被害者やその子孫によって、後続世代の自分に対して謝罪が要求されているとしても、そのことのみを理由にして謝罪するのでは、たんに要求に応えたことや圧力に屈した事実と実質的に違いはない。むしろ、相手からの謝罪の要求がどのような内容であり、どのような理由や背景の下になされているのかを理解したうえで、それに対して自分がどう応答するかということこそが問われていると言える。その点で、こうした場合にそもそも謝罪をするか否か——あるいは、どのような謝罪をするか——にとつて最も重要であるべきなのは、各自の認識や信念、価値観、目的といったものの、それから、相手との相互理解の意志といったものになるだろう。

したがって、^⑥集合的責任を果たすことの二環として、物質的な補償・賠償などを行うだけでなく、先行世代のしたことについて後続世代が謝罪を行うということには、前節で輪郭づけたコミュニケーションの起点という特徴をとりわけ明確に見出すことができる。謝罪は、少なくとも謝罪相手と何らかのコミュニケーションをとる意志を示す行為であり、かつ、謝罪やその証としての補償・賠償などを通じて、焦点となる出来事（戦争、戦時下の事件など）を自分自身がどう理解して受けとめているか、その認識の内容を明らかにする行為でもある。また、人は、自身の謝罪に対する相手の応答、あるいは、相手がそもそも謝罪を求めているという事実やその内容によって、相手が当該の出来事をどう理解して受けとめているかについて多くを知

ることができる。そこから始まるコミュニケーションは、サンタン^eたる結果に終わる可能性もあるが、互いを知り合ったり、互いの認識を摺り^ず合わせた^り、あるいは実効性のある補償ないし賠償の約束が交わされることなどによって、互いの関係を修復し、新たな友好的関係を築くきっかけにもなりうるのである。

(古田徹也『謝罪論 謝るとは何をすることなのか』による。ただし、見出しと本文の一部を省略した)

問一 二重傍線部①～⑤の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各項の中からそれぞれ選び、その番号をマークせよ。

1	① 1 聖火のテント 3 トウリュウ門	2 クントウ を受ける
2	② 1 現場のササツ 3 サセン される	2 犯罪のキヨウサ 4 鳥取サキユウ
3	③ 1 ジョウキ を逸する 3 キハツ性の高い液体	2 訴えをキキヤクする 4 ハンキ を翻す
4	④ 1 ハンドウタイの生産 3 デンドウ入り	2 異口ドウオン 4 トウカイドウ に行く
5	⑤ 1 シンサン をなめる 3 インサン な犯行	2 サンザン な目にあう 4 サンカ に入る

問二 傍線部①の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6

- 1 代表者以外の成員がときに集団を代表し謝罪する理由があると見なされること
- 2 集団に入ったり集団から出たりする自由が原理的な次元で保証されていること
- 3 集団からの離脱が選択肢として存在していても実行するのは現実的でないこと
- 4 再就職が非常に難しい状況下で退職届を出せばさらなる困難に見舞われること

問三 傍線部②が示すこととして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

- 1 前の世代の行為に関する因果責任を持っていない戦後世代が、負担や損失を強いられる場合があること
- 2 戦後世代の人々が謝罪や賠償を拒絶するために国籍を離脱するのは、現実的な選択肢になり得ないこと
- 3 たとえ戦後世代の人が国籍を抜いても、戦前・戦中世代の親や祖父母との縁を断てるわけではないこと
- 4 戦争に直接関わっていないとしても、戦後世代には前世代の戦時下の行為について謝罪する理由があること

問四 傍線部③の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

8

- 1 国籍を変えたり一族との関係を絶ったりしても出身国や血縁関係そのものを消し去ることはできない
- 2 ある国の出身者ゆえに国籍を変えられず、誰かの生物学上の子や孫であるために一族と絶縁できない
- 3 特定の国家や特定の一族においては、属する者が集団から自分の意志で離脱する自由を認めていない
- 4 国家や一族といった集団では、成員の自発的な行為としての加入や離脱は本質的には成り立ちえない

9

問五 傍線部④はどうか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

1 戦前・戦中世代による数多くの不正義が刻まれた歴史を学び、忌まわしい過去と訣別し新たな未来を築く戦後世代の一人として謝罪すること

2 日本の国籍を有することにより政治的その他の特権や利益を享受しているという自覚を持ち、そのような国民の責務の一環として謝罪すること

3 先行世代が培ったものの中で自分が生まれ育ち自らを形成してきたという事実を、自分から切り離しえない要素として引き受けて謝罪すること

4 一般的に後続世代の出自や生育環境は先行世代から継承するものであるという巨視的な歴史認識のもと、先行世代の代理として謝罪すること

10

問六 傍線部⑤の理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

1 納めた税金を賠償にあてるという形ですでに責任を持つ行為の一部を分担しているから

2 少なくとも戦前や戦中において日本国籍を取得せずに暮らしていたことは明らかだから

3 日本で生まれ育った戦後世代が生きているのは異なる歴史的関係性を生きているから

4 日本という国家が過去に犯した侵略行為や非人道的行為の被害国の人かもしれないから

11

問七 空欄 11 に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

1 それゆえ 2 さらに 3 しかし 4 たとえば

問八 傍線部⑥の理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

12

- 1 先行世代の行為について後続世代が謝罪する理由があるか否かについては、人によって判断が分かれるから
- 2 謝罪の要求のみを理由に後続世代が謝罪しても、たんに要求に応えたり圧力に屈したことで変わりないから
- 3 相手の謝罪要求の内容や理由、背景を理解した上で、後続世代がそれにどう応答するかが問われているから
- 4 謝罪の義務を負っていない後続世代が謝罪することは、謝罪相手との相互理解の意志を自ら示すことだから

問九 傍線部⑦が示すこととして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

13

- 1 先行世代のしたことについて物質的補償・賠償では集合的責任が果たせない場合に、後続世代が深く謝罪すること
- 2 焦点となる出来事について、謝罪の主体が自身の理解し受けとめた内容を明らかにし、謝罪相手の認識を知ること
- 3 戦争や戦時下の事件などに関する加害国の国民であるという認識のもと、被害国の国民に向かって頭を下げること
- 4 謝罪の主体と謝罪相手との間で、焦点となる出来事に関する認識を摺り合わせて今後に関する合意を形成すること

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。 解答番号は〔二〕の 1 から 8 までとする。

①「いとかたはらいたしや。ここにて落ち入りて見捜されんいとおつつまし」と思ひて、髪かきこして岩のはざまにかいそひておはするに、人しもこそあれ、中納言のつれづれの紛らはしに、漁^{いさう}させて見給ふなるべし、いとまばゆし。このおはする岩の上に降り給ひて、あな苦しとて、うち見まはし給へば、この岩のはざまにあやしきことかなと思ひて、うち傾^{かたぶ}きて見給ひつ、「ここにあやしきことこそあんなれ、その松明^{たいまつ}」とのたまふ御声に、3 さへ恥づかしきに、松明にて見捜されんこと、とおつつましければ、

I おほめくもことわりなりや木幡山時雨の宿の仮りの契りは
とのたまふ御声に、ふと心騒ぎして、御手をとらへて、

II 木幡山時雨の宿に契^③りおきて幾歳濡らす袖の涙ぞ
とのたまひつつ、御みづから御舟に抱き乗せ奉り給ひて、急ぎ急ぎ御宿へおはして、「さても心憂かりける御心かな。いまひとたび同じ心に逢ひ見んとは思ひ召さで、などや浮きたる波に漂ひ給ひけるぞ」と恨み給へば、「憂き身のおき所侍らで、底の水屑^{みくづ}とならんと思ひたち侍りしを、心憂くも」4とのたまふにぞ、「なほいとあさましきや。今宵はことに七月七日なれば、長生殿^{ちやうせいでん}の言の葉によそへ、比翼・連理の契りをこそは」とよろこび給ふこと限りなし。年月の御物思ひのほども、たがひもしるく、青み痩せ衰へ給ふさまいとわりなしと見給ふ。

〔『木幡の時雨』による〕

問一 傍線部①の意味内容として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

1

1 実に気の毒なことだ。こんな所で身を沈め、人に探し回られるなんて、こちらが遠慮したくなる

2 全く見ていて苦々しい。ここで転げ落ち、人にあれこれ捜されるなんて、思わず気恥ずかしくなる

3 どうにもいたたまれない。ここで物思いに耽^{ふけ}っている姿を探されるのは気が引けるほどつらいのだ

4 本当に決まりが悪いことだ。ここで飛び込んで探し回られるようなことになったら、本当に恥ずかしい

問二 傍線部②の意味内容として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

2

1 中納言が、退屈しのにぎに漁をさせてご覧になっているのだろう

2 中納言が、暇で仕方ないから、自分で漁をして楽しんでいるようだ

3 中納言は退屈をまぎらわせたいなら、漁をさせてご覧になるべきである

4 中納言は、退屈をまぎらわすために、漁をさせてご覧になることもできる

問三 空欄 3 に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

3

1 波の色 2 日の光 3 雨の音 4 月の影

問四 和歌Ⅰの意味内容として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

4

1 あなたと仮の宿で交わした契りがこんなにも不審に思われるのは、もっともな理由があるのでしょうか

2 仮の契りを知らぬふりをするのは当たり前でしょうか、いや、そんなことが許されるはずがありません

3 あなたがおわかりにならないのも、もっともです。木幡山の時雨の折の仮初めの契りなのですから

4 あなたが戸惑うのは、全く筋が通らないことです。木幡山の時雨の折をお忘れになったのですか

問五 II の和歌で詠まれている内容として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

5

- 1 同じ宿で過ごした日々への郷愁
- 2 雨と涙で表現された別離の哀しみ
- 3 時雨の情景に託した別れの覚悟
- 4 木幡山の景色を背景にした旅情

問六 傍線部③の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6

- 1 「奉り」は謙譲語で「お乗せ申し上げ」の意、「給ひ」は尊敬語
- 2 「奉り」は尊敬語で「お乗りになり」の意、「給ひ」は丁寧語
- 3 「奉り」は謙譲語で「乗って参り」の意、「給ひ」は謙譲語
- 4 「奉り」も「給ひ」もともに尊敬語で、作者から読者への敬意を表している

問七 傍線部④の意味内容として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

- 1 それにしても、たいそう嘆かわしいことです。今宵は特に七夕なので、長生殿での長寿を願う言葉になぞらえて、鳥や木との縁を結ぶべきです

- 2 ますます、とんでもないことを。折しも今宵は七月七日、長生殿の一句になぞらえ、永遠の愛の誓いを末永く結びましょう

- 3 本当に珍しいことですね。今宵は七夕なので、長生殿での誓いは止して、織姫と彦星のように、年に一度だけ会うという契りこそ結ぶべきでしょう

- 4 実にみじめな有り様ですね。今宵は珍しく七月七日なので、長生殿の祈願の詞に倣って、ひと晩かぎりの短い逢瀬にしておきましょう

問八 本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 岩陰にいた女は、旧知の男に声をかけられ再会し、改めて思いを語り合った
- 2 仮の宿の契りに失望した女は、身を投げたまま発見されることなく水底に消えた
- 3 女は男の姿に気づき、とっさに松明で顔を照らして自分の存在を知らせた
- 4 人目を避けていた女は、男に発見され、思いとは違う形で引きとめられた

かねてより世話になっている編集者からメールがあった。ゾラの『居酒屋』を訳してもらえませんかというご提言である。自分にそんな力があるのかと深く反省すべきなのに、あまりの絶妙なタイミングに嬉しくなって、まず快諾してからたっぷり苦勞するといういつものパターンに、またしてもはまってしまった。古い作品は骨が折れるという『マノン・レスコー』の教訓も効き目なしだ。

それにしても、読むと訳すとは大違い。ゾラの破格の文章に仰天しっぱなしである。『居酒屋』は「自然主義」の代表作とされている。貧しき者たちのくすんだ日常が、いささか古臭い文体でじとーっと描かれていく。つい、そんなものだと思っ
ていませんか？

ところが、である。ゾラは当時、悪評さくさくだった印象派の画家たちをいち早く熱烈に擁護したことで知られる。それも
そのはず、彼の文章には最先端の美術に比肩しうるような光と色に対する感性が、隅々にまで脈打っているのだ。

長い物語の第一章。男に逃げられ、二人の幼子を抱えて生きていかなければならなくなったジェルヴェーズは、洗濯女として働く。大きな倉庫のような共同洗濯場の描写をこゝ読あれ。

「乳白色の霧のように立ち込めたあたたかい湯気に、ほやけた陽光があちこちから差していた。隅々から湯煙が立ち上っては広がり、奥のほうを青白いベールで覆っていた。石鹸の匂い、すえたような湿っぽい匂いが充満していた。洗濯台にそって女たちが列をなし、腕を肩までむき出しにし、めくり上げたスカートからは色物の長靴下やごつい編み上げ靴をのぞかせている。猛烈な勢いで洗濯物を叩きながら、笑ったり、騒音に負けじと体をそらせて何か叫んだり、たらいの底にかがみこんだりしている。女たちはみだらで、乱暴で、不格好で、にわか雨に降られたみたい^①に赤らんだ肌から湯気を立てていた。」
一部はしよってご覧いただいたが、『マノン・レスコー』の素朴な湯気に比べて、湯気のオーケストレーション^①といいた
ような広がりのある描写になっていることがわかりいただけるだろう。乳白色を始め、青白かったり赤らんでいたりと、対

象は鮮やかな色彩のもとにとらえられている。しかも女たちの肉体はしどけなくも力に満ちて、いまにも何か大変な動きが巻き起こりそうだ。実際、この直後に、小説はジェルヴェーズと敵役の女とがぐんずほぐれつする、女子プロレスの一大格闘場面へと突入する。

とはいうものの、十九世紀小説はやはり文章が長くて重い。風通しよく訳すのは骨が折れる。しかもゾラには、庶民の言葉をそのまま小説に持ち込んだ言語改革者としての一面もある。のちにセリーヌが彼を手本と仰いだほどで、登場する労働者たちの言葉には辞書や解説書に載っていないような卑語が次々に顔を出す。また、ポリティカル・コレクトネスを意識すべき二十世紀の訳者のことなどおかまいなしに、差別的表現も飛び出してくる。

ひいひい言いながら、しかしフランス小説最高のヒロインの一人であるに違いないジェルヴェーズへの忠誠を誓ったのだからと自分を励まし、彼女の悲劇的運命のゆくえを訳し続けていく。

フランス語原文で最後まであと百ページというところまで辿り着きながらも、他の仕事に圧迫されて停滞が著しい。そこでふと思った。二十一世紀のいま、世の話題はAIでもちきりである。なぜ翻訳にもその助けを借りないのか？ 英語では、かなり実用性が高まっているというではないか。そこで DeepL のアプリをパソコンに仕込んで、試しにフランス語原文をワンフレーズ入れてみた。

愛しのジェルヴェーズは、洗濯女から身を起こして立派なクリーニング店を構えるまでになったものの、あえなく没落。いまは一介の掃除婦となって日銭を稼ぐのに汲汲^{きききく}としている。そんな彼女の様子を、DeepL の訳文で見てみよう。

③「彼女はポカリ水に慣れており、毎回30スーを稼いでいた。」

軽い衝撃を覚える。十九世紀フランスに、現代日本のスポーツドリンクのようなものが存在したのか？ こちらで用意した訳は「灰汁^{あけ}洗いなら心得たもので、彼女は毎回三十スーを稼いだ」というものなのだが。しかし、うっすらと合っているとこもある。どんどん原文を放り込んでみると、さらに衝撃的な訳文が返ってくる。ジェルヴェーズを虐げる女、ヴィルジニーの夫についての描写だ。立派なひげを生やした亭主である。

④「夫が頭を上げると、帝王切開の赤い口ひげが土気色の顔の中に生えていた。」

凡人なら「皇帝^{カイザ}ひげ」と訳すところ、物凄い訳語を選択したものだ。

そんなふうに DeepL の訳文をあげつらうのは、決してネガティブな気持ちからではない。小さな訳者には思いもつかない大胆な言語実験の成果に目を瞠^{みは}っているのである。これだけシュールな展開を見せるのは、そもそもゾラの原文に潜んでいるシュールな要素を掘り起こしたのだとも言える。

そういえば、昭和の時代、文学全集収録の『居酒屋』の翻訳には、こんな表現があった。工場での仕事をさぼって酒を飲んでいる労働者たちの姿を見ての、ジェルヴェーズのせりふである。

⑤「まあ、どうでしょう！ あの人三つれの男たち、手に大変な毛をはやしているわよ！」と彼女がささやいた。」

超現実的とまではいわずとも、かなり驚くべき表現ではなからうか。印象派の画家が描いたらどうなっただろう。しかし「手のひらに毛が生える」とは、じつは「怠^怠けている」という意味の慣用表現なのである。かつての仏和辞書にはその記載がなくて、訳者は文字どおりの意味で剛毛（？）な男たちのことだと思ったのかもしれない。

そうした情報の不足に、AI もいま悩んでいるところなのだろう。突拍子もない訳文の多くはそれで説明がつく。しかし短い文章、平易な構文については別段問題のない訳を提示してくれる（こともある）。助手としての採用を検討してもいいのではないか。

思えばこれまで、共訳という場合を除けば、ほぼつねに一人で何もかも背負って翻訳にいきしんできたのである。これはあまりに原始的というか、効率の悪い仕事のやり方だった。いったん訳稿を提出したのちは編集者と校正者が親身になって面倒を見てくれるにせよ、問題はそれ以前の基礎作業である。

フランス料理のレストランだったらと考えてみよう。フルコースの料理を供するとき、ジャガイモの皮むきやタマネギのみじん切り等々は見習いがやるのでは？ シェフはもつと先の方の、^⑥味付け部分に手腕をふるうものと想像される。もちろんワシオペで見事な味を生み出す町の食堂の名コックも多々存在する。しかし大長編をゼロから一字一句、すべて自力で訳してい

くなどというのは、もはや、進歩に背を向ける頑迷さの表れでしかないのかもしれない。

古来、翻訳業界には、大家が弟子に「下訳」をさせるといふならわしがあつたとも聞く。そんな偉そうなことをする気にはなれず、個人商店的に細々とやってきたが、AIに下訳をさせてそれに朱を入れるという構えもありうるのでは。ゾラを相手の格闘にあたつて、残りの百ページは、そういう具合にAI翻訳に下準備をしてもらうやり方を試みてみようか。邪道かもしれないけれど。

かつて高校生のころ、クイーンが人気を博し始めたときの記憶がよみがえる。プリティッシュロックの本道を継ぐいいバンドが出てきたと、とりわけセカンドアルバムに夢中になったのだが、LPのジャケットの隅にひとこと注記されていた。「ノー・シンセサイザーズ!」。シンセサイザーなどという小道具は使わず、ブライアン・メイ自らのお手製エレキギターだけで「本物」のサウンドを出しているんだよというメッセージとこちらは受け止め、6 あるバンドだとの思いを深めたのだった。その伝でいけば将来、翻訳者には「ノー・AI翻訳!」の表記を付したものが現れるかもしれない。

あるいは逆に、AI翻訳の能力が格段にあがつてきたなら、人間の役割は「監訳」に絞られていくかもしれない。翻訳の過程の最後に登場して味見をし、調味料を加減するような役割だろうか。だが、そこまでくればもう、「監訳者」が介入する必要もなくなりそうだ。翻訳者なる存在は姿を消し、AI翻訳は世界中の人々の暮らしにまんべんなく溶け込み、翻訳という意識さえなくなる。

バベルの塔建設によつてもたらされた、言語の複数化という呪いから人類がついに解放される日が来るのだとしたら、喜んでその日を迎えようではないか。言葉の壁が消え去る奇跡的事態を前にして、翻訳者の消失を嘆くにはあたらない。とはいへ、^⑦その日はおそらく来ないという確信も揺るがないのだ。AIがどんなに正確な答えを出してきても、それをいじくりたくするのが人間である。そもそも言葉とはその本性上、終わりが無いものだ。たえず言い換え、解釈し直す営みをおしてのみ言葉は生き続けるのである。人間がいなくならないかぎり、その運動が止まることはないはずだ。

こちらがやや切ない思いでそんな物思いにふけっているかたわらで、DeepLはさらにまた、あまりに奔放な訳文を提示し

てくれている。

『居酒屋』の先ほどに続く部分。生活の苦勞に耐えきれず、酒浸りになってしまったジェルヴェーズをめぐる一文だ。

「トウガラシパンティーを悲しみのせいにするのは、前にも見たことがある。」

そんなものを前に見たことがありますか？ どうやら、「ぐでんぐでんになる」というゾラの原文の俗語表現が「トウガラシパンティー」に変換された模様だ。たしかに、泥酔のあげくそういうような代物を頭からかぶるといったマンガやコントの情景が思い浮かばないこともないが……。

現在のところ、少なくともフランスの十九世紀の名作を訳す局面において、AIはいわば 8 を見せており、手助けをしてくれるという以上に、こちらが介抱しなければならない場面が多すぎる。だが、その性能の進歩は人間の予想をはるかに超えるものであるらしい。AIが驚異の成長によってわれわれを「監訳者」の立場に祭り上げてくれるようになるまで、温かい目で成長を見守ることにしよう。

（野崎歓『翻訳はおわらない』による）

1

問一 傍線部①の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 湯気の多彩な描写が共鳴し合うように一つの光景を成している
- 2 洗濯場から聞こえる物音が楽器を奏でるように描写されている
- 3 多彩な光や色がいかにもオーケストラの演奏舞台を連想させる
- 4 女たちの活気ある様子を多種多様な楽器の音色にたとえている

問二 傍線部②の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

2

- 1 『居酒屋』のヒロインであるジェルヴェーズの魅力に心を奪われて彼女の言動に忠実に従うことを決めた
- 2 ジェルヴェーズを主人公に持つ『居酒屋』という作品の翻訳を誠実に最後まで成し遂げることを決意した
- 3 フランス小説最高のヒロインであるジェルヴェーズのためならば翻訳上のどんな苦難にも挑む気になった
- 4 主人公ジェルヴェーズの悲劇的な運命が時代を越えて伝わるように原文に忠実な翻訳という方針を定めた

問三 傍線部③や④のような訳文になったのはなぜか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

3

- 1 Deplの翻訳機能は知的階級の語彙を出発点としていて、大衆的な生活をめぐる語彙がまだ不足していたから
- 2 Deplの翻訳機能はゾラの言語改革者としての革新性の一翼を担おうとしつつ、冒険的になりすぎていたから
- 3 Deplの翻訳機能は字義どおりの翻訳には対応できても、俗語や慣用表現に対応するのはまだ困難だったから
- 4 Deplの翻訳機能は難解な文章を平易にするために、原文とまったく無縁な突拍子もない語の選択に走るから

問四 本文の文脈上で傍線部⑤の訳文は何を示しているか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

4

- 1 昭和の時代の文学全集の翻訳には現在から見ると実力不足の学者も携わっていた
- 2 辞書に記載がない表現に関しては文学全集の翻訳者ですら誤訳することがあった
- 3 単に正確な訳文には飽き足らない冒険心を持った翻訳家もかつては存在していた
- 4 情報不足が原因だと推測される珍訳ならばA Iに限らず人間も同様に行っていた

問五 傍線部⑥の比喩が表している本文中の言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

5

- 1 共訳
- 2 下訳
- 3 A I翻訳
- 4 監訳

問六 空欄 6 に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 勇気 2 気骨 3 元気 4 気転

問七 傍線部⑦はなぜか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 7
- 1 AIがどんなに正確な翻訳を出してきても人間の手が加わったものには及ばないから
- 2 AIは異なる言語を交換（翻訳）する能力はあっても言語自体を生産する力はないから
- 3 たえず言い換え解釈し直す翻訳の営みを通して生き続けていくのが言葉の本性だから
- 4 人間が存在するかぎり言語の複数化という運動が止まることは原理的にありえないから

問八 空欄 8 に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 8
- 1 トウガラシの効いた味付け 2 超現実的な奔放さ
- 3 マンガやコントの情景 4 泥酔したような足どり

（以下余白）